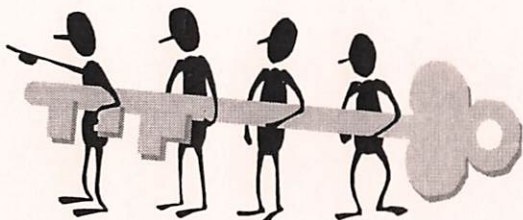
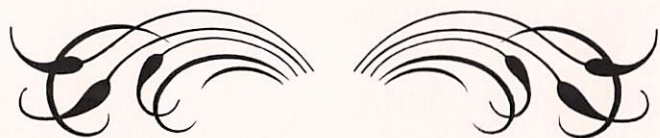




1996 年度卒業記念

どこでもドアのかぎ





一冊の本の中にはひとつの世界があって、本の表紙はその世界に通じる扉だとすれば・・・ そう、これはまさに「どこでもドア」なんですね。でも、いざ開けてみようとする、種類も数も多すぎる、と言ってもいいくらいで、どのドアを、どうやって開けたらいいの？と、困ってしまうかもしれません。そこで、「本を読むこと」のプロであり、大先輩でもある先生方に、おすすめのドアを教えていただいたら、まるでどこでもドアのかぎたばのような小冊子ができました。これは、短いながらも楽しいお付き合いをさせてもらった県短生協から、母校を巣立っていくみなさんへの、ささやかな贈り物です。みなさんがドアを開けたくなくなったときに、このかぎたばがお役に立ちますように・・・。

1997年3月／県短生協教職員委員会



目次

島津 光夫 (学長)	1
森川 英明 (生活科学)	1
本間 善夫 (生活科学)	2
山田 雅子 (食物栄養)	3
石原 和夫 (食物栄養)	3
佐藤 恵美子 (食物栄養)	4
太田 優子 (食物栄養)	4
櫻井 慶一 (生活福祉)	5
島崎 敬子 (生活福祉)	5
姉齒 暁 (生活福祉)	6
植木 信一 (生活福祉)	7
松木 真言 (幼児教育)	7
大桃 伸一 (幼児教育)	7
金澤 妙子 (幼児教育)	8
大橋 儀隆 (英文)	9
福嶋 秩子 (英文)	9
渋谷 義彦 (英文)	10
佐藤 英志 (英文)	10
飯田 規和 (国際教養)	10
青木 周三 (国際教養)	11
渡辺 淑子 (国際教養)	12
城山 正幸 (国際教養)	12
村屋 勲夫 (国際教養)	13
板垣 俊一 (国際教養)	13
波田野 節子 (国際教養)	14
若月 章 (国際教養)	14
木佐木 哲朗 (国際教養)	15
石川 伊織 (国際教養)	16
水上 則子 (国際教養)	17
三宅 登之 (国際教養)	18

島津 光夫

学長

『豊かさとは何か』

暉峻淑子／岩波新書

『「風と共に去りぬ」のアメリカ』

青木富貴子／岩波新書

『考古学の散歩道』

田中琢・佐原真／岩波新書

『高学歴時代の女性』

利谷信義他編／有斐閣選書



森川 英明

生活科学

『深夜特急 1～6』

沢木耕太郎／新潮文庫

これまで何人かの学生に尋ねてみてびっくりしたのですが、新潟から外に出たことのない人が意外と多いんですね。貴重な学生時代、バイトや勉強なんかしている暇があったら（先生方すみません）、親に借金してでも＜旅＞に出かけて欲しいと思います。それでも、卒業までに旅になんか出かけられないという人のために、この本を推薦します。もちろん旅に出る人にも是非読んでほしいのですが。（「猿岩石」読むぐらいなら...）

『獺の食べのこし』

中島らも／集英社文庫

中島らもは、わたしの好きな人物の一人です。彼の書き物は文学作品から漫才のネタ本まで本当に幅広く、それぞれにおもしろいのですが、この「獺の食べのこし」や「恋は底から」（集英社文庫）のようなエッセイには、下世話な話題を最後には詩的な言い回しでまとめてしまうところが妙に良くできていて、その想像力の豊かさや、読者への問いかけが「中島らも」の力量を表しているように思います。

『エエカゲンが面白い』

夫光 幸治 森毅/ちくま文庫

『レポートの組み立て方』

木下是雄/ちくま文庫

科目の評価方法として「試験」と「レポート」の選択肢が与えられた場合に、多くのみなさんは「レポート」を熱望する傾向にあります。でも本当に「レポート」でいいの？、と言いたいくらい、本気で書こうとするとこれほどたいへんなシロモノはないのですよ。後期試験も押し迫った今の時期、この本を読んだところで一朝一夕に「レポート」が書けるようになるわけではないのですが、少なくとも、「レポート」を書いたつもりが「感想文」や「作文」になってしまわないように1章から3章までを読んでみて下さい。一年生のみなさんは、試験が終わってからの春休みにじっくり読んでおくと、来年度、勉強の仕方も変わるかもしれませんよ。

『実践 言語技術入門』

言語技術の会/朝日選書

『若き数学者のアメリカ』

藤原正彦/新潮文庫



本間 善夫

生活科学

『アルケミスト—夢を旅した少年』

P・コエーリヨ/地湧社

錬金術師(アルケミスト)になりたいと、あるケミスト(化学屋)は思った…。

化学は「変化」を扱う学問。この本であなたの心にも何かの変化が！人はいつか旅に出る。

※最近、文庫版も発売になりました。(角川文庫ソフィア)

山田 雅子

食物栄養

『知の技法』

小林康夫・船曳建夫編／東京大学出版会

「大学で、どのように学び、どのように自分の知的世界を構築してゆくか？」を、時の流れの中でとらえさせる知的探究の方向づけを示唆する書物

『腸は考える』

藤田恒夫／岩波新書

「小さな脳」と形容されるほどの精妙な働きをしている消化器官「腸」の研究を通して、学び、究める道程での人間のふれ合い、人間の在り方を問いかける味わい深い書物

『ブレインサイエンス・シリーズ2（脳の老化）』

大村裕・中川八郎編／共立出版



石原 和夫

食物栄養

『食糧パニック』

浅井隆／第二海援隊

最近のわが国では、外国産も含め多種多様の食品が出回り、それらを享受しているが、食糧自給率の極めて低いことをご存じですか。今年の世界の天候次第では食糧パニックに陥る可能性のあることを一人でも多く知っていただきたい。

佐藤 恵美子

食物栄養

『おいしさの科学』

山口静子・山野善正編

調理学の目的は「おいしさを科学する」ことであり、科学的な裏づけのもとに実践して、心温まる食事作りが大切と考えます。おいしさは「甘、酸、塩、苦、旨味」などの五原味と香りによる化学的な味と、硬さ、粘り、舌ざわりなどの力学的な味としての物理的な味（テクスチャー）が合体しています。本書は人間の心身を健康に正しく育てるところの食物を「おいしさ」の立場から科学する座右の書といえるでしょう。

『いま蘇る味の世界 東佐訢子の人とことば』

林定子・川端晶子編／講談社出版サービスセンター



太田 優子

食物栄養

『星の王子さま』

サン＝テグジュペリ

貴重な学生時代には、ぜひ英語版・仏語版で！

櫻井 慶一

生活福祉

『福祉の思想』

系賀一雄/NHK 出版



島崎 敬子

生活福祉

『自分を好きになる本』

パット・パルマー/径書房

『差別を見抜く眼』

今野敏彦/明石書店

自分と自分が生きる社会のありのままの姿を知るために、まづ
ご一読ください。

『死ぬ瞬間』

E・キューブラー・ロス/読売新聞社

『人生の親戚』

大江健三郎/新潮文庫

タイトルの不思議さにひかれてぜひご一読ください。「大江氏
は難解」といわれますが、これはそれほどでもないですよ！

姉齒 暁

生活福祉

『人間を幸福にしない日本というシステム』

カレル・ヴァン・ウオルフレン／毎日新聞社

『なぜ世界の半分が飢えるのか』

スーザン・ジョージ／朝日新聞社

『人はなぜ騙されるのか 非科学を科学する』

安齋育郎／朝日新聞社

『コメの話』

井上ひさし／新潮文庫

タイと比べて高いだの、農家の補助金が多いだのと、弱々しい農業を攻撃する声はいかにも声高。しかし、その『常識』は本当か？このミステリーに挑んだ作家井上ひさしさんの、『X-ファイル』より断然おもしろい一冊です。

『日本国憲法の本質』

渡辺洋三／新日本新書

『カブトガニの不思議』

関口昇一／岩波新書

『「血液型と性格」の社会史（血液型を信じているあなたへ）』

松田薫／河出書房新社

このほか、岩波ブックレット・かがわブックレットなどはすぐ読めて手軽、どれも読んでおきたいものばかり。こちらどうぞ。



植木 信一

生活福祉

『どんぐりの家（コミック）』

山本おさむ／小学館



松本 真言

幼児教育

『アクティブ・マインドー人間は動きの中で考える』

佐伯胖・佐々木正人編／東京大学大出版会

忙しい人程、いい仕事をしている人が多いなど常々実感し、感心させられている一人ですが、それはきっと人間が常に動き回り、外界に働きかけて認識をつくり出し、修正し、目的に向かってより確かな情報を抽出しているからできる芸当なのではないか。固いけど一読の要がありそうだヨ。



大桃 伸一

幼児教育

『人間をみつめて』

神谷美恵子／みすず書房

「知ってるつもり」でも放映された神谷美恵子さん。女性として、人間として美しく生きた彼女の珠玉の作品

『太陽の子』

灰谷健次郎／理論社

街のみんなが子どもたちの先生になって欲しい（勿論あなたも）。そんな願いからこの作品を推せんします。

『自立にむかう旅』

乾彰夫／大月書店

自立の難しい時代。本当の自分がみえてくるかも知れない作品です。



金澤 妙子

幼児教育

『育ての心』

倉橋惣三／フレーベル新書

『幼稚園真諦』

倉橋惣三／フレーベル新書

『倉橋惣三 その人と思想』

坂本彦太郎／フレーベル新書

『子どもたちのいる宇宙』

本田和子／三省堂

『子どもの世界をどう見るか』

津守真／NHK ブックス

『保育の体験と思索』

津守真／大日本図書

『子ども学のはじまり』

津守真／フレーベル館

『人間現象としての保育研究 1～3』

津守真・本田和子／光生館

大橋 儀雄

英文

『福翁自伝』

福沢諭吉／角川文庫

『日本の思想』

丸山真男／岩波新書

同じように思えるものに特異な点を、異質にみえるものにある原理を見出すという一見相反する方法論がすばらしくかみ合っている本です。又、良識、知性、寛容に基づく真剣な対話の大切さを教えてくれます。Ⅳ、Ⅲ、Ⅱ、Ⅰと読むとわかり易いと思う。



福嶋 秩子

英文

『日本語と女』

寿岳章子／岩波新書

『日本語はおもしろい』

柴田武／岩波新書

『日本の方言』

柴田武／岩波新書

『希望のヒロシマ』

平岡致／岩波新書

渋谷 義彦

英文

『ソフィーの世界』

ヨースタイン・ゴルデル／日本放送出版会

ノルウェーの作家ゴルデルの書いたこの書は、世界中で爆発的な売れ行きとなった。14歳の少女ソフィーはある日、「あなたはだれ？」と書いた手紙を受けとります。これを機会に彼女は哲学という未知の世界に導かれていきます。



佐藤 英志

英文

『自分の中に奇跡を起こす！』 ウェイン・W・ダイアー／三笠書房

毎日なんだかやる気が起きない。過ぎたことが気になって集中できない。そんな人に、ぜひ読んでほしい一冊です。一日10分でもこの本に接していると、見違えるように毎日が楽しくなるはずです。物事をプラス思考で見る手本を提供してくれます。

他、ダイアーの著書は、数冊、三笠書房より出版されています。



飯田 規和

国際教養

『罪と罰』

ドストエフスキー／岩波文庫

これは刑法の本ではなくて、小説です。先日、この本を読んでロシアの小説が嫌いになったという人に会いましたが、あなたはどうか？

『検察官』

ゴーゴリ／岩波文庫

『現代の英雄』

レールモントフ／岩波文庫

『復活』

トルストイ／岩波文庫

以上、すべて小説（ロシア文学）。小説のおもしろさを知って欲しいと思います。



青木 周三

国際教養

『文章の書き方』

辰濃和男／岩波新書

筆者の辰濃和男さんは、マスコミ界で軟らかいものを書かせたらこの人の右に出る人はいない、と言われる人。文章は、人そのものを表現するものであることを教えてくれるはずです。

『孔子』

井上靖／新潮文庫

「論語」の成立過程を材料にした、井上靖 80 才のときの小説です。若いときにこういうものを読むと、必ず何かが頭のどこかに残るに違いないと思います。

『日本人と日本文化』

司馬遼太郎・ドナルド・キーン（対談）／中公文庫

日本のことは案外知らないものです。司馬遼太郎とドナルド・キーンさんの語り口は何とも独特で、知らないうちに知識が身につきます。

渡辺 淑子

国際教養

『ヴェニスの商人』『夏の夜の夢』『ロミオとジュリエット』『リヤ王』他

シェイクスピア作・小田島雄志訳／白水社

シェイクスピアのどの作品でも。翻訳で読んでてもとてもおもしろいです。



城山 正幸

国際教養

『コモン・センス』

トマス・ペイン／岩波文庫

筆者は、かなり破天荒な青年期を送ったあと1774年に新大陸に移住した(1737^キ—1809^キ)。移住の翌々1776年に定価2シリングで出版されたのが本書です。それは、米独立革命の成る僅か半年前のことでした。新大陸の人民の間に「独立」への怒涛のような流れを作ったとされています。が、圧政に対して徹底的に抗うのは一つの権利だという、すこぶる common な sense が本書の底流にあります。ファシズムの脅威があるかぎり、いつの時代にも読みつがれるべき古典の一つでしょう。

『権利のための闘争』

イエーリング／岩波文庫

我が国には、「権利」主張をしないでひっそりと生きるのが美德であるかのように考える人がいまだにいます。「智に働けば角が立つ」というのでしょうか。しかし、本当にそうでしょうか。「権利」や「法(秩序)」についての認識を新たにし、たくましくも洗練された人生を送って欲しいと念じながら、本書を薦めます。気楽にどうぞ!

『法女性学への招待』

山下他／有斐閣選書

近・現代法は「男」の視点で「男」のために作られたものだと
言う人がいます。小生には返す言葉がありません。それならば、
「女」の視点で「現代法」を見直してみても如何でしょうか。各
専門分野で立派な仕事をしているすこぶる良識ある四名の著者達
がこの視点でスパッとさばいてくれた好著。



村屋 勲夫

国際教養

『世界の歴史』

中公文庫（全16巻）

『ルーツ（上・中・下）』

アレックス・ヘイリー／文庫版あり

『軍国日本の興亡』

猪木正道／中公新書

戦前、日本がなぜ戦争に突入していったか、客観的資料を駆使
して書かれた良書です。ぜひ一読をおすすめします。



板垣 俊一

国際教養

『歌を忘れた日本人』

小島美子

波田野 節子

国際教養

『ベルサイユのばら（コミック）』

池田理代子

人物の名前を覚えるだけでもたいへんなフランス革命がぐっと身近になってしまう… 楽しみながらヨーロッパの歴史に親しめる、おすすめ本です！

『フーシェ革命暦Ⅰ・Ⅱ』

辻邦生／文藝春秋社

『フランス革命下の一市民の日記』

セレストン・ギタール／中公文庫



若月 章

国際教養

『女たちのアジア』

松井やより／岩波新書

『女たちがつくるアジア』

松井やより／岩波新書

今日のアジアの繁栄は、さまざまな不正や抑圧状況をそこに孕みながら進行しつつあります。そんなアジア社会の現状に勇気と自信をもって立ち向かうアジア女性たちの姿があります。たくましくそしてしなやかに生きるアジア女性たちの息吹を是非、本書から感じとってください。

『国際感覚ってなんだろう』

渡部淳／岩波ジュニア新書

新しい時代の国際感覚は、何よりも一人の人間として生きる姿勢、物の見方またそこから導き出される行動から会得できることを平易に説き起こしてくれる一冊です。

『在日外国人 新版——法の壁・心の溝』

田中宏／岩波新書

日本の国内には、実は様々な「国境」が存在していることを在日外国人と交流する中で教えられることがしばしばあります。「内なる国際化」に耳を傾けることなくして、日本の真の国際化は実現できないことを気づかせてくれる良書です。



木佐木 哲朗

国際教養

『悲しき熱帯』

レヴィ=ストロース／中央公論社

単なる南米アマゾンの旅行記ではなく、西欧中心主義あるいは科学万能主義の終わりを告げ、われわれとも異なる理性や思考を示すとともに、人間味あふれる知的なまた魅力的な書である。

『イシ——北米最後の野生インディアン』

T・クローバー／岩波書店

『未開の顔・文明の顔』

中根千枝／中央公論社



『ファンシイダンス (コミック)』

岡野玲子 / 小学館

東京は某(駒沢)大学に学ぶ寺の息子で坊主の卵のパンクロッカー陽平君が、裏日本の某大本山明軽寺(アッカリイジと読むらしい: どう見ても永平寺なんだけど……)で繰り広げる椿事の数々。禅宗、それも曹洞宗を知りたかったら一読の価値あり。こんなどたばた話のネタにするのを許してしまうあたりが禅宗の禅たる所以。岡野センセ、実に絵がうまい。

『陰陽師 (コミック)』

岡野玲子 / スコラ

時は平安、所は都。当代随一の陰陽師・阿部清明が怨霊・妖怪のたぐいを次から次へと鎮撫するのではあるけれど……清明ちゃん、どうみてもファンシイダンスの陽平くんなんだな、これが。直衣やら狩衣やらで陽平くんのバンド<フラミンゴウズ>にまじって、「黒山羊さんからお手紙ついた・白山羊さんたら読まずに食べた・しかたがないからお手紙書いた・さっきのお手紙・ご用はなあと(これをアップテンポのバンクにのせて全員が疲れてダウンするまで延々リピートし続ける、というのがフラミンゴウズの十八番なのです: 困ったもんだ)」と歌ってても、まるで違和感がないからますます困ったもんだ。ところで岡野センセ、さらに絵がうまくなってる。特に日本建築の細部描写の緻密さはたいしたもの。構造を知っていればもっとうまくなることは請け合い。

『パリ燃ゆ』

大仏次郎 / 朝日新聞社

今年は大仏次郎の生誕 100 周年なのです。1871 年のパリコミューンの蜂起をアツかったこの作品は、彼の膨大な資料収集に基づいて書かれました。横浜にある大仏次郎記念館に行くと、その収集品の一部を見ることができます。何と、たった数ヶ月の命しかなかったこの革命政府が書類に押しつけていた政府の印章まで集めているのです。こんなもの、どうやって手に入れたのでしょうか。彼のこの畢生の大作を読んで、「花の都パリ」とやらの裏側の人々の生々しい歴史を知ってください。

『キャナリー・ロウ〈缶詰横町〉』

スタインバック／福武文庫

孤独と連帯と自立と自由について知りたかったら、読むべし。
特に、孤独を知らない人、孤独を知ってはいるけれどそれに耐えられない人は、絶対読むべし。T型フォード改造トラック(?)
を逆走させての山登りと二度目のパーティーの場面は圧巻!

『古典教養そこつ講座』

夏目房之介／文藝春秋社

「芸術は感情の様式化だ」。本書の主張はこの一語に尽きる。
これほど明快に、しかも自分で古典芸能を習うという修練を通して、自分の体でもって芸術の本当のところを語るというのは、なかなかできることではない。しかもマンガ付きである。祖父さんは日本文学史に残る大文豪の某夏目先生なのだが、孫もこれでおしてなかなかの天才である。



水上 則子

国際教養

『もの食う人びと』

辺見庸／共同通信社

パキスタンで、フィリピンで、アフリカで、ロシアで、さまざまなもの食べる人々(または、食べない人々)の姿は、私たちの食を改めて見直す目を与えてくれます。著者は、時にはおぞましい食べ物でさえ現地の人と一緒に食べています。日本人である自分と彼らとの間の深い溝を埋める手段とはいえ、すごいと思います。同じ状況におかれたとき、私には食べられるだろうか?と、折りにふれて考えてみますが、あまり自信はありません。しかし、選択の余地なく食べている人々が現にいるのだということ、そして、私たちにもそういう日がやってくるかもしれないのだということは、忘れてはならないと思います。

『女性画家列伝』

若桑みどり／岩波新書

この本に登場する、さまざまな時代や国で活躍した12人（著者の若桑さんも含めれば13人）の芸術家たちは、程度の差こそあれ、男性を中心に作られている社会の中で、「職業」を持ち、「自分」を持って生きようとした女性たちでもあります。みなさんが社会に出て、いろいろな困難にぶつかったとき、この先輩たちの物語は、知恵と勇気を与えてくれるでしょう。新書ながら豊富な図版もうれしい一冊です。

『ソラリスの陽のもとに』

スタニスワフ・レム／早川文庫

私がこれまでに読んだSFの中で、文句なしに一番面白かった作品です。「SF」という枠を離れて、小説全体で考えてもベストテンに入りそうです。タルコフスキーの傑作映画「惑星ソラリス」の原作ですが、映画のほうはかなり違った作品になっています。私は小説のほうがより好きです。

飯田規和先生の翻訳も味わってください。

『一世紀より長い一日』

アイトマートフ／講談社

これも飯田先生の訳された本。原作者のアイトマートフはソビエトを代表する作家の一人です。私がこの本に出会ったのはみなさんと同じくらいの年齢だったときで、寝る前に少しだけ、と読みはじめたのに、そのまま夢中になって、一気に最後まで読んでしまいました。読み終えて我にかえり、外を見たらすっかり朝になっていたの、あわてて大学へ出かけたのを覚えています。



三宅 登之

国際教養

『日本語の意味 英語の意味』

小島義郎／南雲堂

外国語学習の際、まったく日本語と同じ点は覚えやすいし、逆にまったく異なる点もかえって覚えやすい。しかし両者間にはしばしば微妙に違う「ずれ」があったりして、そこが難しく、かつ面白い。そんな外国語の面白さの分かる本。

どこでもドアのかぎ
～先生がたがすすめる一冊の本～

県短生協 教職員委員会編

1997年3月19日発行

